

シリーズ この人に聞く **第2回**

なぜ国際協力 やるのですか？

医学博士・写真家・国際協力師／NPO法人宇宙船地球号代表 **山本敏晴さん**

2000年から数々の国際協力団体に所属し、アフリカや中東で医療援助活動を行う。2004年NPO法人「宇宙船地球号」を創設。「持続可能な世界」の実現を目指し、世界に目を向ける人材の育成を行う。著書には『世界で一番いのちの短い国』ほか多数。今回は『「国際協力」をやってみませんか—仕事として、ボランティアで、普段の生活でも』(2012年)をもとにうかがいました。



現地の人々が描くべき未来

——国際協力を志したきっかけはなんですか。

山本 小学生のとき、父に連れられて南アフリカ共和国を訪れたのですが、当時、その国ではアパルトヘイト(白人至上主義・人種差別政策)が行われていました。まず飛行機が着いて、空港の建物に入る所から驚きました。白人と有色人種(日本人を含む)では、空港の入り口が違うのです。トイレなども別で、他の施設でも同様でした。その後、学生時代に途上国へ写真の撮影に行くようになり、国際協力への関心が高まっていきました。

——これまでどんな活動を行ってきたのですか。

山本 西アフリカのシエラレオネという国では、医師として直接的に医療活動を行い、マラリア等の治療を行っていました。アフガニスタンでは、医療に加えて病院等の建設、医学部の学生の教育などを行いました。その後、国境なき医師団の日本理事となり、多数の国でのプロジェクトにかかわりました。以後は自分の団体「NPO法人宇宙船地球号」を立ち上げ、国際協力にかかわろうとする人を増やす、という活動を行っています。

——現地の人々に本当に喜んでもらえたと思ったことは？

山本 最初は自分で患者さんに医療をし、治って喜んでいただくことが嬉しかったのですが、私自身はやがて日本に帰ってしまいますので、自分の後任となる医師や看護師を現地に残すことに力を入れてきました。担当した各途上国

で、その国の医師や看護師を育成し、彼ら自身の手で彼らの国の患者さんを未来永劫、治すことができるようになったとき、「本当に現地の人々に喜んでもらえる」のではないかと思っています。

——失敗だったことはありますか？

山本 たとえば、途上国で貧しい患者さんのために臨時の診療所を開設すると、「熱がある、咳がでる」と言う患者さんが多数やってきます。ところが、その人たちに薬を無料で渡すと、自分では飲まず、近隣の町へ行ってその薬を売ってしまうことがあります。医療を受けるよりも食料の確保のためのお金を優先する本当に貧しい人が、やむを得ずそうすることもあれば、ウソをついて薬をだましとり自分の遊興費(酒代など)に使う悪い人もいます。

——国際支援には、とかく西欧(先進国)の価値観を押し付けるようなところはありませんか。

山本 まず言葉の説明です。緊急援助とは自然災害の直後や紛争の最中に現地へ赴き、食料・医療・仮設住宅などを提供することです。開発援助とは上記のような状態ではなく、国や地方自治体が正常に機能しているときに、外国の援助団体が支援をしたい人々(あるいは国や村などの組織)のところに行き、どのような援助をしてほしいかを相談することです。前者の緊急援助は外国人が主導して「助けてあげる」ことになりますが、後者の開発援助の場合はあくまで「現地の人々が主導して、自分たちの未来の姿をイメージし、それに向かって現地の人々自身が努力していく」のが基本だと思います。外国人は、あくまでそのサポート。

ですが実際に途上国で行われている開発援助をみてみると、現地に元々あった伝統的な職業や風習を駆逐し、西洋的な効率の良い仕事や価値観を押し付けることが多いように私は思っています。(具体例を挙げるにはスペースが足りませんので興味のある方は拙著を読んでいただければ幸いです。)

世界の根源的な問題

——今後予想される人口増加について、ご意見をお聞かせ

ください。

山本 国連の人口推計部が今世紀中に世界人口は100億を超えると発表しています。この原因は複数あり、1) アフリカなどの国では、未だに1人の女性が4人以上産む。10歳前後から少女が性行為を開始、十歳代から出産開始。2) 多民族国家の場合、自民族の数を増やしたほうが国内で(選挙等で)有利。なお世界のほとんどの国は多民族国家。3) キリスト教・イスラム教の中の大きな派閥が出産の制限に反対(生命誕生は神の意思)。宗教色の強い国が国連の会議で家族計画に反対。4) 子どもを助けることには援助のお金が集まるが、家族計画には援助のお金が集まらない、など。

こうして起こる人口増加に加え、一人ひとりの人間が日本人のような(電気等を大量に使う)豊かな暮らしをしたい、と思うようになるため資源の枯渇(石油、水、食糧などの不足)、排出されるゴミの増加などに拍車がかかり、気候変動などの環境問題が起こってしまっているようです。

私たちにできること

——今の便利で快適な生活が途上国の貧困や児童労働、環境破壊とかかかわっているとしたら、私たちはどのようなことを意識すればよいのでしょうか。

山本 普段からの私たちの生活の仕方が大切だと思います。水や電気をふんだんに使い、欲しいままに商品を購入し、ゴミや二酸化炭素を大量に排出することが問題です。それらを全体的に減らす必要がありますが、そのなかでも重要

な部分が「消費者が商品を買う」瞬間です。企業には、社会に貢献しよう、環境に配慮しようと努力している企業もあれば、全然やっていない企業もあります。あなたが商品を買うときに(相対的に)良い企業の商品を買うことが必要です。企業が口先だけでなく、本当にそうした配慮をしているかどうかを見抜くため調査をしてきました。興味のある方は宇宙船地球号の「企業の社会的責任ランキング」のホームページをご覧ください。<http://www.ets-org.jp/csr/>
——日本に居ながら国際協力をやるには、日ごろから何を心がけたらいいでしょうか。

山本 国際協力をするには3つの種類の人が必要です。一つ目は「考える人」。先進国側にいてプロジェクトの計画を立てる人。組織の偉い人や大学教授などです。二つ目は「つなぐ人」。上記の計画を実行するための「人・物・金・情報」を用意する人です。三番目が「やる人」。途上国でプロジェクトを実施する人。緊急援助では外国人が主体ですが、開発援助の場合は途上国側の人々(国などの公務員や村のコミュニティ)が主です。日本にいながら国際協力にかかわりたい場合、「つなぐ人」になるのが妥当です。まず途上国にある問題を知るためニュース・本・ネット・現地活動報告会・スタディーツアー等で勉強し、それをブログやPTAの回覧板などに書いて啓発し、より多くの人々が世界をより良くしようと行動するように誘うのが一案。

あるいは興味のある国際協力団体の事務所に行き、広報・会計・募金・人材の募集・翻訳などの手伝いをする方法もあります。興味のある団体を見つけるには国際協力団体が集結する「グローバルフェスタ」などのイベントに行くか、都道府県の国際交流協会に連絡してみましよう。

——最後に、なぜ国際協力や支援をやるのですか。

山本 一つは、日本よりも途上国のほうが圧倒的に悪い数字が発表されていること(乳児死亡率、就学率など)。もう一つは、私たちが日々購入している商品が途上国での児童労働の原因になっていること(インドで少女たちが綿花摘み、携帯電話に必要なレアメタル採掘のための強制労働、など)。

三つ目に以下の考え方を紹介しておきます。「人に優しいことをすると、その人が他の人にも優しくしてくれて、やがて世界中に優しさが広がっていく」。



アフガニスタンで診察中の筆者